

「穴水宣言」に寄せて

～震災から得られた地域の絆を減災社会につないでいくために～

2007年3月25日、震度6強の地震が穴水町を襲いました。私たちは今回地震がもたらした被災の厳しい現状と、そこから得た学びを忘れることなく、被災地からのメッセージとして、多くの人々に伝えていくことが自分たちの役割であると考えました。

穴水町では発災直後から、「自分たちのまちは自分たちで守る」という思いに突き動かされた多くの人たちが、被災しながらも、協力し合い、住民主体の支援活動を展開してきました。特に周囲への遠慮や不安から、自ら「助けてほしい」と言い出せない、かといって自分で対処するために行動を起こすことが難しい方々が、復興の歩みから取り残されていくことも気がかりな問題としてありました。

そのような中、地域、ボランティア、社会福祉協議会、行政が一丸となって「困った時はお互い様」を合言葉に、避難所や仮設住宅での声かけ、炊き出し、引越しの手伝い、元気付けイベントの開催などを行ってきました。大きな被害を受け、生活再建に向けて先の見えない不安を抱えていた方々が、少しでも笑顔を取り戻してくれれば——という思いで、できることからひとつずつ取り組みを積み重ねてきましたが、地域で支えあって生きることの大切さを、改めて実感しています。

震災から1年を迎えた今、私たちが強く感じていることは、「一過性の復旧作業だけでは、人々の安心で安全な暮らしは取り戻せない」ということです。

復興に向かう歩みの速度は人それぞれ異なります。静かに現実を受け止める被災者の声なき声に耳を傾け、一人ひとりのペースに、ゆっくり丁寧に寄りながら、震災をきっかけに、より暮らしやすく、活気があり、地域の絆を深めていける穴水町を目指していきたいと思えます。

被災地 穴水町から

穴水宣言

大きな被害を出した穴水町ですが、非常時でも一人ひとりのいのちとくらしを大切に活動が行われ、被災地特有の殺伐とした雰囲気もあまり感じられず、むしろ普段のように緩やかな時間が流れていたことが印象的でした。

そして、一人ひとりに寄り添う活動で大きな役割を果たしていたのが女性でした。自分も被災しながら、しかし、「その人ができるだけ以前と同じような生活ができるように」と、細かな点に気を配り、しかもそれをあたりまえのようにこなしていた女性。

女性は、災害時により困難な状況に置かれやすいため、保護されるべき存在であるという側面もありますが、他方、いのちとくらしを守るという領域において重要な役割を果たしてきた存在でもあります。敢えて「女性」という視点から災害への備えと対応を考えてみる時、これまで十分に認識してこなかったけれど重要な課題や対策が見えてくるように思います。

本日は、地震発生後、被災された方々がどのような状況に置かれるのか、またその支援がどうあるべきなのかを、女性の視点から考える一日となりました。本会議での議論を踏まえ、ここに穴水宣言を採択いたします。

2008年3月22日 「女性のための防災会議」

【1】避難所や仮設住宅の運営において女性の参画を確保し、女性をはじめ、“より困難に直面することが予想される人たち”のニーズに配慮した環境づくりを推進します。

(1) 女性をはじめ「特別なニーズ」を持つ人達に対するきめ細かな配慮が必要です。特に、災害によって強いストレスを受けている被災地では、女性・高齢者・子供等、弱い立場におかれやすい人達に理不尽な言動が向けられることが少なくありません。

穴水町では、巡回・声かけ活動がすぐに始まり、これが心と体に関する相談窓口となり、問題を未然に防ぐソフト対策の役割を果たしていました。

(2) 他方、女性の能力は被災生活の運営に大きな力にもなります。先の見通しが立てられず不安になる被災生活から、力強い復興は果たせません。復興の基盤となる被災生活を、より快適で希望の持てる生活にしていく上で、女性の視点や工夫は大きな力となります。地域社会の最も弱い部分への配慮がきちんと行われていることが、全体の安心・安全につながると言えるでしょう。

穴水町では、見知らぬ人の頻繁な避難所訪問が被災者のストレスになることにも配慮し、ボランティア等の訪問も上述のような地元の人たちによる定期的訪問に同行する形を取りました。

また、穴水町の地区懇談会の中で「声を出す人は救われるが、声を出さない人はじっと我慢している。その思いを敏感に感じ取ろうとすることが大事」という意見がありました。ぎりぎりまで我慢して声を出さない人がいることも忘れてはならないでしょう。

これらのことをふまえ、今後、以下のような対策を進めていくことを提案します。

- ①「特別なニーズ」に配慮した物資・資機材（衛生用品、介助トイレ）の備蓄・供給を。
- ②性別に配慮した避難空間の運用を（更衣、授乳、保育、トイレ等）。高齢の女性だけでなく、若い女性も辛かった。遠慮が大きくニーズを伝え難いことにも配慮を。
- ③相談窓口を設置し、配慮や暴力防止マニュアルを備えておく。
- ④自律した避難生活を可能にするための設備を整え（調理、洗濯等）、普段と同じような生活空間の運用を心がける（食事と寝場所の分離）。
- ⑤声が出せない人（心身・視聴覚に障害を持つ人、言語が不自由な人など）や、声が出せない状況（土地柄からくる遠慮、不安や不信により言いたいことを言い難い状況）に対する配慮を怠らず、対応を進める。

- 【2】地域社会や家庭生活の主要な担い手である女性を支援していくことが、生活の再建や復興に大きな力になります。家庭や職場において、女性が仕事をしやすい環境づくりを心がけ、社会的に支援していく仕組みづくりを進めます。

(1) 災害によって家庭や家庭生活も大きく被災します。ライフラインの途絶、生活関連施設の被災は、ダイレクトに家庭生活とそれを支える女性にのしかかっていきます。加えて、救援・復旧活動が最優先される被災地では、家庭と家庭生活が軽視されがちです。しかし、くらしの基盤、つまり、家庭や家庭生活が崩壊すれば、生活の再建も地域の復興も果たせません。家庭や家庭生活の主要な担い手である女性が問題を一人で抱え込まないように支援していくことも、被災地の復興にとって重要なことです。応急復旧作業として屋内外の片付が終わった後も、日常生活上の支障や、これからの生活の不安は残ります。

穴水町でも高齢独居の方が取り残されがちな状況があり、そうした人たちへの巡回訪問活動が重要な役割を果たしていました。

(2) 「家は女性が守ってくれる」と思えば、安心して仕事ができます。逆に、家が不安だと外で十分な力を発揮できないでしょう。救援や復旧の最前線で活動する人達に

良い仕事をしてもらおうという観点からも、家庭や家庭生活への支援は重要な意味をもつのです。

(3) 同時に、働く女性を支援することも重要です。

穴水町では、保育所で被災者の児童を一時預かりするサービスがありました。また、母親が災害対策の仕事に忙殺されたため、その影響が子供に現れ、困難な場面に直面したとき、「短い時間でも抱きしめてあげて」という助言を受けて実行したところ、子どもも親の状況を理解し、乗り切ることができたというケースもありました。

(4) さらに、職場だけでなく、地域の中でも、女性は重要な役割を果たしています。地域で活動する女性を支えること、また、女性が地域で活動しやすい仕組みづくりを進めていくことも求められるでしょう。

穴水町では、民生児童委員をリーダーとした「地域福祉推進チーム」によって、発災後の要援護者安否確認が短時間で終わられました。地域福祉推進員には、ボランティア団体である女性組織も組み込まれていますが、要援護者を見守る人が平常時から決められており、推進員が民生児童委員に連絡をし、スムーズに状況把握できたことは注目に値するでしょう。

これらをふまえ、今後の対策として以下のことを提案します。

- ⑥取り残され易い人に視点を置いた継続的な生活支援・見守り活動の体制を事前に考えておく。
- ⑦救援・復旧の最前線で働く人達は、災害後、不眠不休の対応を求められることが多い。とくに女性は、職場だけでなく、家庭の中でも母親、妻、子供（老親）としての役割を果たすことが求められる。母親不在で不安になる子供、老親、そして職場から帰れない人達に対する具体的な支援、及びその人達の気持ちを受け止めるセクションが必要。
- ⑧こうした災害時の事態に対して、職場・地域・家庭の中で、共通の認識と理解を求めていく。

【3】「減災社会」の実現にむけて——社会の仕組みを作るプロセスに、女性の参画を促し、マイノリティ（少数者）を排除しない、多様な価値観や地域の文化を尊重した社会づくりを目指します。

- (1) 災害は地域社会の全ての人を巻き込み、生活のサイクルを狂わせます。被災しても被害を最小限に食い止められる社会、被災しても早く立ち直れる社会にしていくためには、普段の生活のあり方が問われます。

- (2) 繰り返しになりますが、災害への備えにおいて、「いのちとくらし」を守る女性の視点は、重要な役割を果たすと言えるでしょう。女性の視点を生かした施策づくりを推進していくことも求められます。
- (3) また、災害からの復興には、様々な人達の力が必要になります。とりわけ女性の果たす役割は大きいといえるでしょう。

穴水町では、被災者が集まり手芸講座を開き、ここで穴水グッズ「ホットちゃん」（ドレスの形をした手拭き）が開発され、新潟県中越沖地震の被災者に送りました。誰かのために役立っているという気持ちが、生き甲斐となり生活復興の足がかりとなっています。

商店街の復興フォーラムに主婦の立場での発言を求められたとき、ボランティアに依頼して発表してもらいました。穴水町では、女性組織も防災訓練に参画し、炊き出しだけでなく、この防災訓練にも参加していますが、さらにこうした女性の力を、もっと復興段階の対策に反映させていくことも今後の課題の一つです。

今後の対策として、以下のことを提案します。

- ⑨防災計画の策定に、女性の参画を促し、女性の視点を活かした予防・対応計画づくりを推進する。
- ⑩復興計画の策定に女性の参画を促し、女性の視点を活かした計画づくりを推進する。
- ⑪復興まちづくりの中でも女性の意見を尊重する文化を創造する。

以上のようなことを踏まえて、社会的に立場の弱い人でも安心して暮らせる社会、誰にとっても暮らしやすい社会を目指していくことが、「減災社会」につながると我々は考えます。被災地の一日も早い復興を祈念して。

さいがいふくし石川